The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『学生生活調査に見る学生の音楽愛好』「音楽」の内容と愛好の質的変化
Author(s)	加藤, 善子
Citation	大阪大学教育学年報. 1999, 4, p. 19-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4359
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 第4号（1999年）
Annals of Educational Studies Vol.4

『学生生活調査に見る学生の音楽愛好』
「音楽」の内容と愛好の質的変化

加藤善子

【要旨】
本稿は、昭和初期に各学校で実施された学生生活調査をてがかりに、当時の「音楽」の内容と学生の音楽愛好スタイルの質的変化を明らかにしようとするものである。まず、調査結果において、昭和7～9年前後に「音楽」としてカテゴライズされるものが変化している。それ以前は、「音楽」は、洋楽・邦楽共に楽器演奏や各ジャンルを含まないものであったが、その後、「音楽」は西洋音楽を内包し、邦楽を排除して集計される傾向がみられた。すなわち一部の「邦楽」は「音楽」の外に認識されるようになったのである。これは、当時の洋楽音楽界における変化と対応しており、この時期に洋楽は他のジャンルと袂を分けて「クラシック」中心に組織化されて行き、それに対応して学生の音楽愛好スタイルも変化することになった。このため、「音楽」愛好者は、昭和期を通じて、調査表の上からある傾向を見出したり解釈することが不可能であるような結果を示しているが、そこには「音楽」そのものもつ意味とその愛好の質的変化があったためである。

はじめに

本稿は、戦前期に行われた各種学生生活調査を資料として用い、可能な限り学生の音楽愛好スタイルを検討し、それによって「音楽」というカテゴリーの内容の変化を検討することが目的である。昭和初期から各学校において個別的に学生生活調査が行われ、趣味や娯楽なども合わせて調査されている。しかし、これらの調査は、方法が異なるなど利用の仕方には十分注意する必要があるが、それを差し引いても貴重な情報を提供してくれる。本稿では、特に、これら調査結果の中から、学生の趣味・娯楽、具体的には音楽愛好の状況をここから読み取り、可能な限りの分析を試みる。

各学生調査によると、資料に限界はあるものの、高等教育を受けた学生の間で音楽を趣味に挙げる者が最低1割から高いところでは5割を占めている。当時音楽が、洋邦問わず、男子の趣味としてはどちらかというと奨励されなかったことを考えると、この数字は非常に高いとみなすことができよう。また、その他に同程度の割合で挙げられている趣味は、「読書」「映画」であり、「音楽」を含めたこの3種類の趣味は、学生が「趣味」として最も多く挙げるものであった。つまり、「音楽」は学生の間で最も趣味として愛好されるものの一つであり、当時の学生を対象として「音楽」が当時持っていた意味を考察することは、当時の一般の「音楽」愛好者や、戦後の音楽愛好の普及などの問題を考える上でまず考慮しなければならない課題であると考えられる。

以下、それぞれの資料を吟味しながら、当時の「音楽」をめぐる状況と照らし合わせ、学生の音楽愛好がどのような意味を持っていたのか、またその愛好スタイルに変化はなかったの

か、またあったとすればそれはどのような変化であったのか、という点を考察する。

1.各種学生生活調査における「音楽」愛好者

ここで用いる調査は、昭和4年から昭和17年までに各学校で実施された各種学生生活調査である(表1)。これらの調査では、調査対象は在籍者全員であり、休学者・長期欠席者は除外しているものが多い。そして、文部省思想局が纏めた「学生生徒の生活に関する調査」(『思想調査資料』第32集1936)をこれに加え、考察する。趣味・娯楽をどのように質問しているか、また集計の方法は、表に示した通りである(実施年度の不明のものは含まれていない)。但し、ここでは「音楽」と答えた者が何を「音楽」とみなしているか、また集計者が何を「音楽」として分類しているかは不明である。いくつかの調査では、その内訳を表示しているものがあるので、適宜それらを参照しながら分析を進める。

昭和4年といえば、すでにラジオ放送が始まっており、蓄音機も普及している時代である。しかし、調査報告書に見られる「音楽」愛好者の比率は、ばらつきが大きい。それぞれで調査の目的・方法が異なるため、これらの数字を直接比較することはできないが、「音楽」カテゴリーのもつ意味の検討、また各調査の学年別、学部別の愛好者数の比較は可能であろう。

表1）　学生調査の概要と音楽愛好者の比率

実施校	調査実施時	調査表配布数	申告者数	申告率(%)	音楽愛好者数	割合(%)	質問形式	回答形式	備考
東京帝国大学	1929/00/00	7191	4439	61.7	491	11.1	「趣味」「娯楽」と分けて質問	自由記述・単数回答	「趣味」と「娯楽」それぞれ別集計
長崎高等商業学校	1929/11/15	635	547	86.1	319	58.3	「趣味及娯楽」	自由記述・複数回答	
鹿島高等学校	1931/00/00	551	152	27.6	28	18.4	「趣味及び愛好するスポーツ」	不明	
神戸商業大学	1932/00/00	606	505	83.3	131	25.9	「趣味と運動」	自由記述・複数回答	
東京帝国大学	1934/00/00	7464	5402	72.4	1390	25.7	「趣味娯楽／種類」	自由記述・複数回答	
東京商科大学予科	1934/10/29	640	575	89.8	231	40.2	「趣味」「娯楽」と分けて質問	自由記述・複数回答	「趣味」と「娯楽」を同時集計
長崎高等商業学校	1934/12/4	785	675	86.0	224	33.2	「趣味及娯楽」	自由記述・複数回答	
和歌山高等商業学校	1935/6/27	482	482	100.0	227	47.1	「趣味」	自由記述・複数回答	「趣味ト娯楽ト運動」を同時集計
北海道帝国大学	1935/11/11	2156	1936	89.8	495	25.6	「生活様式」内「主ナル娯楽／種類」	自由記述・複数回答	
第二高等学校	1936/09/00	624	603	96.6	130	21.6	「趣味」「娯楽」と分けて質問	自由記述・複数回答	「趣味」と「娯楽」を同時集計
山口高等商業学校	1936/9/20	750	725	95.4	144	19.9	「趣味及娯楽」	自由記述・単数回答	
山口高等学校・山口高等商業学	1936/11/2	1033	932	90.2	171	18.3	不明	複数回答	集計は「趣味、娯楽種類調」とあり
山口市中等学校(3校)	1936/11/2	1996	1996	100.0	173	8.7	不明	複数回答	集計は「趣味、娯楽種類調」とあり
山口市女子校(4校)	1936/11/2	1628	1628	100.0	271	16.6	不明	複数回答	集計は「趣味、娯楽種類調」とあり
第二高等学校	1937/06/00	630	603	95.7	89	14.8	「趣味娯楽」(但し備考欄)	自由記述・複数回答	
東京帝国大学	1938/00/00	7208	5433	75.4	1443	26.6	「趣味娯楽」	自由記述・複数回答	
立教大学(予科)	1938/7/31	745	745	100.0	324	43.5	「趣味嗜好」内「趣味ノ主ナル種類」	自由記述・複数回答	煙草・酒類と並行して質問
立教大学(学部)	1938/7/31	858	406	47.3	146	36.0	「趣味嗜好」内「趣味ノ主ナル種類」	自由記述・複数回答	煙草・酒類と並行して質問
第二高等学校	1942/03/00	779	603	77.4	109	18.1	「文化及厚生調査」内「趣味及娯楽」	自由記述・複数回答	

注：調査表配布数は在学者から休学者及び長期欠席者を除いたものである

表2）　趣味娯楽調査の記載のある学生調査（昭和7～11年）

実施校	質問形式	回答形式	「音楽」愛好者	「音楽」以外の音楽に関するカテゴリー		
				洋楽に関するもの	邦楽に関するもの	その他
東京帝国大学	「趣味娯楽／種類」	自由記述・複数回答	1390(2位)	ダンス	舞曲・詩吟・能	レコード
広島文理科大学	「趣味娯楽／種類」	自由記述	57(1位)		舞曲・尺八・能・義太夫・琵琶	レコード
大谷大学	不明	複数回答	41(1位)		尺八・舞曲	
浦和高等学校	「趣味娯楽／種類」	自由記述	109(1位)		尺八	ラヂオ
広島高等師範学校	不明	自由記述・複数回答	158(1位)		舞曲・詩吟・尺八	レコード・ラヂオ
名古屋高等工業学校	不明	不明	213(1位)		尺八・舞	ラヂオ
山口高等商業学校	不明	不明	135(1位)			
西南学院高等学部	不明	不明	50(4位)		舞曲	蓄音機
千代田女子専門学校	「娯楽」	不明	8(4位)	少女歌劇	能楽・三味線・邦楽	
千代田女子専門学校	「趣味」	不明	37(2位)	声楽	舞曲・琴・	舞踊
熊本医学専門学校	「趣味」「娯楽」に分離	自由記述	99(1位)		浪花節・長唄・舞曲	
広島高等工業大学	「趣味娯楽」	プリコード・選択式	記載なし			
和歌山高等商業学校	「趣味」	自由記述	記載なし			
大分高等商業学校	「趣味及娯楽」	自由記述	記載なし			

注：文部省思想局「学生生徒の生活に関する調査」『思想調査資料』第三十二集(1936)より作成

1-1.「音楽」の集計のされかた

まず、「音楽」がどのように集計されていたかを各調査から考察する。調査が実施された順に趣味として「音楽」およびそれに関連する回答を整理すると、昭和4年から17年の間、前半期には「音楽」以外にもオルガン、ピアノ、謡曲、尺八、といったものが集計されているのに対し、後半期ではそれらのほとんどが調査報告書には現われなるという傾向がみられる(表2)。つまり、何が「音楽」として見なされるかという点に変化があったと思われる。これには以下の二つの点に注意する必要がある。第一は、集計者が何を「音楽」としてカテゴライズしたかという点であり、第二は、回答者が何を「音楽」とみなしていたかという点である。もちろん、これには調査時にどのように趣味が問われたか、という点も関係する。そこで、まずは時系列的に音楽に関連する趣味がどのように調査結果にまとめられたかを整理し、その上で、質問の形態別では回答及び集計にどのような違いが見られるか、順に検討する。

ここで扱う調査のうち、最初に行われた昭和4年の長崎高等商業学校研究館による「生徒生計調査報告」には、「趣味及娯楽」の内訳が記されている。これによると、「音楽」として分類された319件のうち、単に「音楽」という回答が153件、尺八48件、バイオリン30件、マンドリン25件、ハーモニカ13件、ピアノ6件、邦楽4件、洋楽4件、声楽4件、琵琶4件、謡曲3件、義太夫3件、浪曲3件、蓄音機3件、琴3件、オルガン2件、オーケストラ2件、その他10件、とある。ここに音楽全体として纏められたもののうち、約半数を占める「音楽」以外の166件の具体的な回答は、洋楽が86件、邦楽が67件、その他と蓄音機13件、と分類することができる。東京帝国大学が実施した「生計調査報告」ではどうか。昭和4年では、「趣味」として「音楽」に分類されたものは491件、それとは別に謡曲が21件、集計されている。同調査中「娯楽」として「音楽」に分類されたものは343件、そしてそれ以外に尺八196件、ヴァイオリン81件、謡曲65件、マンドリン52件、ピアノ41件、蓄音機27件、ハモニカ21件、声楽19件、ギター15件、ラジオ12件、オルガン9件、義太夫3件、作歌2件、という集計がなされており、蓄音機とラジオは除いても、具体的に楽器や演奏(鑑賞)するジャンルが「音楽」というカテゴリーの外に挙げられているのは興味深く、合計すると502件に上る(「音楽」・蓄音機・ラジオ・作歌を除く)。洋楽か邦楽かで分類すると、邦楽264件、洋楽238件となる。昭和7年神戸商業大学「学生学園生活統計」では、趣味・娯楽及びスポーツが同時に集計されている。「音楽」に分類されるのは131件、「音楽」としては分類されていないが音楽に関係する項目は、謡曲31件、尺八26件、邦楽4件、洋楽4件、舞踊2件、ダンス3件、琵琶1件、長唄4件、清元1件、常盤津1件、ピアノ2件、ヴァイオリン1件、レコード3件、ラヂオ2件、三味線1件、童謡レコード1件、となっている。

しかし、この後に行われる学生生活調査では、このように「音楽」のほかにも挙げられていた音楽に関連する項目がほとんど集計結果に表れてこなくなる。「音楽」に集計されているのは1390件、その他に音楽に関して集計されているのはレコード60件、謡曲53件、ラヂオ20件、詩吟13件、程度である。「洋楽」「邦楽」といったカテゴリーは見られない。昭和10年北海道帝国大学による学生生徒生活調査報告」では、「音楽ニハレコード32」(495中)と注に記されている程度である。またここでは「機械工作」に「ラジオ7」という記載がある。東京帝国大学昭和13年調査でも同様に、「音楽」は1443件、ここでも「洋楽」「邦楽」と答えるものがいない(ある

いは調査結果に記載されていない)。それ以外ではレコード163件、ダンス26件、レビュー21件、の三種が挙げられているのみである。昭和17年第二高等学校「生活調査報告」においては、「音楽」109件のほか、尺八6件、琵琶1件、吟唱1件が注に示されるにとどまる。

また、文部省思想局によって収集、編纂された「学生生徒の生活に関する調査」(1936)では、それまでに行われた学生調査230のうち、「学資関係諸事項、生活様式一般、身上関係諸事項、生活様式一般、身上関係諸事項等総じて学生生徒の生活内容一般に関する調査報告」およびそれに「準ずるもの」74調査を選び、かつ昭和7年以降に調査されたもの(ただし、それ以前のものも若干含まれている)の諸結果が掲載されている。そのうち、趣味娯楽に関する調査

表3)質問形式別「音楽」愛好者率及び「音楽」以外のカテゴリー

実施校・実施年	質問形式	回答形式	「音楽」愛好者率(%)	「音楽」以外の音楽に関するカテゴリー 洋楽に関するもの	邦楽に関するもの	その他
東京帝国大学(1929)	「趣味」	自由記述・単数回答	11.1		謡曲	
	「娯楽」	自由記述・単数回答	7.7	ヴァイオリン・マンドリン・ピアノ・ハモニカ・声楽・ギター・オルガン	尺八・謡曲・義太夫	蓄音機
長崎高等商業学校(1929)	「趣味及娯楽」	自由記述・複数回答	28.0	バイオリン・マンドリン・ハーモニカ・ピアノ・洋楽・声楽・オルガン・オーケストラ	尺八・邦楽・琵琶・謡曲・義太夫浪曲・琴	蓄音機
神戸商業大学(1932)	「趣味と運動」	自由記述・複数回答	25.9	洋楽・ダンス・ピアノ・ヴァイオリン・童謡レコード	謡曲・尺八・邦楽・琵琶・長唄・清元・常盤津・三味線	舞踊・レコード・ラヂオ
東京商科大学予科(1934)	「趣味」「娯楽」	自由記述・複数回答	40.2	ダンス	謡曲・民謡研究	ラヂオ
長崎高等商業学校(1934)	「趣味及娯楽」	自由記述・複数回答	24.7	バイオリン・マンドリン・ハーモニカ・ギター	尺八・浪曲・笛・邦楽	レコード・口笛
和歌山高等商業学校(1935)	「趣味ト娯楽ト運動」	自由記述・複数回答	47.1		詩吟・謡曲・浪曲	ラヂオ
第二高等学校(1936)	「趣味」「娯楽」	自由記述・複数回答	21.6			
山口高等商業学校(1936)	「趣味及娯楽」	自由記述・単数回答	19.9			
第二高等学校(1937)	「趣味娯楽」	自由記述・単数回答	14.8		尺八・詩吟・長唄	
東京帝国大学(1938)	「趣味娯楽」	自由記述・単数回答	26.6	ダンス・レビュー	観能	レコード
第二高等学校(1942)	「趣味及娯楽」	自由記述・複数回答	18.1		尺八	

注:表1より作成

表4)質問形式別「音楽」愛好者率及び「音楽」以外のカテゴリー

実施校・実施年	質問形式	回答形式	音楽愛好者率(%)	「音楽」以外の音楽に関するカテゴリー 洋楽に関するもの	邦楽に関するもの	その他
広島文理科大学	「趣味娯楽ノ種類」	自由記述	不明		謡曲・尺八・観能・義太夫・琵琶	レコード
浦和高等学校	「趣味娯楽ノ種類」	自由記述	不明		尺八	ラヂオ
東京帝国大学(1934)	「趣味娯楽ノ種類」	自由記述・複数回答	25.7	ダンス	謡曲・詩吟・観能	レコード・ラヂオ
北海道帝国大学(1935)	「趣味娯楽ノ種類」	自由記述・複数回答	25.6		謡曲・舞踊・詩吟	
立教大学(予科)(1938)	「趣味娯楽ノ種類」	自由記述・複数回答	43.5			
立教大学(学部)(1938)	「趣味娯楽ノ種類」	自由記述・複数回答	36.0			

注:調査実施年の記載の無いものは昭和7年以降実施
表1、表2より作成

結果を表2に抜き出した。調査時が記載されているのは、大谷大学(昭和10年6月)のみである。

この資料と、各学校の調査報告書を併せて、趣味に関する質問形態の違いから、「音楽」の分類に変化がみられるかを整理したものが、表3、表4、である。前者は単に「趣味」「趣味及娯楽」という項目で、自由記述させるものである。後者は、自由記述ではあるが、「趣味娯楽ノ種類」を記述するように指示しているものである。この結果、広く「趣味」を尋ねる調査では、「音楽」と回答する学生以外に、様々な楽器や音楽の分野を挙げている者が多く、集計の段階でも「音楽」に一括されることはなかった傾向が見られる。しかし、1935年以降に実施された調査では、このような自由記述にもかかわらず、特に洋楽に関する分野において、「音楽」以外のカテゴリーが現れなくなる。また、最初から「趣味娯楽ノ種類」を調査するものは、昭和7年以降に実施されたものに限られており、ここでは、「音楽」以外に挙げられる様々な音楽の分野や楽器が集計結果には現れていない。特にこの傾向は洋楽に関するものに強く、「音楽」以外に集計結果に現れているカテゴリーは主に邦楽に属するジャンル・楽器であることが明らかになった。

したがって、洋楽に関する分野が「音楽」以外にカテゴライズされることがなくなるという傾向は、質問の形態を問わず、昭和7～9年前後から現れてきたといえる。つまり、「音楽」とい

う言葉の意味、またはその意味する範囲が変化したと考えられ、特に洋楽に関するものが「音楽」に包含されることが当然とされるようになった。しかし、邦楽の場合はそれ以前と同じであった。尺八や琵琶、詩吟などは、依然「音楽」とは別項目として集計されているからである。では、この変化は回答する側にあったのか、分類・集計する側にあったのか、どちらであろうか。これには、文部省『学生生徒生活調査』(1938年調査、発行年不明)が参考になる。この調査における「趣味・娯楽」の集計結果には、「音楽」の他に、「洋楽」「邦楽」「謡曲」「尺八」「詩吟」「浪曲」「レコード」「ラヂオ」という項目があり、少なくとも「洋楽」と回答する学生は、昭和13年にも存在していたことを示している。すなわち、回答者も洋楽器演奏などは「音楽」あるいは「洋楽」と見なしてはいたが、それ以上に、各学校それぞれの調査の集計段階において、「洋楽」を「音楽」として分類する傾向が強かったと考えられる。
では、この時期に、なぜこのような変化が学生調査の上に見られるようになったのか、という点が問題となる。これは2節で考察する。

1-2.学年別及び学部別にみる「音楽」愛好者

では、学年別、あるいは学部別に趣味を集計している調査結果を検討してみよう。このような集計が現れるのは、東京帝国大学を除いて(ただし学部別のみ)、昭和10年以降に実施された調査からである。先に述べたように、昭和10年以降の調査においては「音楽」というカテゴリーがどの調査においても差異が少ないと考えられるため、趨勢を把握し、かつ共通する傾向を明らかにしたいところだが、残念ながらそのような共通の傾向はみられない。まず、東京帝国大学の一連の調査において、昭和4年では、「趣味」として「音楽」を挙げる学生が、理系では工学部において16.7%をはじめ、すべての学部で10%を超えているのに対し、文科系では法学部8.1%、文学部9.2%、経済学部11.4%という低さである(表5-1)(ただし、「娯楽」に「音楽」を挙げる者の比率は各学部間であまり差がない(表5-2))。昭和9年では、「音楽」愛好者は各学部で20%以上存在したが、やはり理系においてその比率が高く(表5-3)、また昭和13年もその傾向は維持されている(表5-4)。また、高等学校・専門学校においては、学年・専攻によって増減がまちまちである。第二高等学校では、理系に愛好者が多い時期もあり、また学年があがるにしたがって理系と文系で愛好者の増減が逆転する年度もある(表6-1、6-2、6-3)。専門学校でも和歌山高等商業学校(1935)では学年があがるにつれて愛好者も増えるが(表7)、山口高等商業学校では逆の現象を示す(表8)。このように、各学校によって、音楽愛好は様々な様相を呈している。特に、西洋文学や芸術に最も親和的と考えられる文学部の学生が理系の学部や法学部・経済学部に比して「音楽」愛好者が少ないという点は、興味深い。

以上の現象を説明するためには、このデータの背後にある当時の「音楽」をめぐる状況を考慮し、かつその上でこのデータの再解釈を行う必要がある。学生の音楽愛好からしばし離れて、昭和期における職業音楽家や評論家等をとりまく「音楽」関係者の世界ー特に評論家集団に焦点を当てて、この疑問に一つの解釈を与えることを次節以降で試みる。

表5-1) 東京帝国大学(1929)「趣味」

所属	法学部		医学部		工学部		文学部		理学部		農学部		経済学部		計	申告者数
	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	
人数(%)	113(8.1)	1397	45(10.2)	442	114(16.7)	682	58(9.5)	610	34(15.0)	227	42(12.5)	336	85(11.4)	745	491(11.1)	4439

表5-2) 東京帝国大学(1929)「娯楽」

所属	法学部		医学部		工学部		文学部		理学部		農学部		経済学部		計	申告者数
	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	
人数(%)	93(6.7)	1397	32(7.2)	442	52(7.6)	682	55(9.0)	610	20(8.8)	227	28(8.3)	336	63(8.5)	745	343(7.7)	4439

表5-3) 東京帝国大学(1934)「趣味娯楽」

所属	法学部		医学部		工学部		文学部		理学部		農学部		経済学部		計	申告者数
	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	
人数(%)	405(23.4)	1731	113(23.0)	491	239(29.6)	807	203(25.4)	798	76(29.8)	255	122(28.9)	422	232(25.8)	898	1390(25.7)	5402

表5-4) 東京帝国大学(1938)「趣味娯楽」

所属	法学部		医学部		工学部		文学部		理学部		農学部		経済学部		計	申告者数
	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	
人数(%)	486(26.0)	1869	154(29.8)	516	165(20.2)	816	177(29.8)	593	116(51.3)	266	154(32.6)	473	191(21.2)	900	1443(26.6)	5433

表6-1) 第二高等学校(1936)

学年	1年		2年		3年		計	申告者数
	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	
文科(%)	10(18.9)	53	12(24.0)	50	8(13.3)	60	30(18.4)	163
理科(%)	30(21.1)	142	34(24.3)	140	36(25.7)	140	100(22.7)	440
計	40(20.5)	195	46(24.2)	190	44(20.2)	218	130(21.6)	603

表6-2) 第二高等学校(1937)

学年	1年		2年		3年		計	申告者数
	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	
文科(人)	68(10.9)	55	7(13.7)	51	9(16.5)	58	22(13.4)	164
理科(人)	28(18.9)	148	21(14.1)	149	18(12.6)	142	67(15.3)	439
計	34(16.7)	203	28(14.0)	200	27(13.5)	200	89(14.8)	603

表6-3) 第二高等学校(1942)

学年	1年		2年		3年		計	申告者数
	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	
文科(%)	14(20.9)	67	7(12.5)	56	7(16.2)	43	28(16.8)	166
理科(%)	20(11.9)	168	27(19.6)	138	34(26.0)	131	81(18.5)	437
計	34(14.5)	235	34(17.5)	194	41(23.6)	174	109(18.1)	603

表7) 和歌山高等商業学校(1935)「趣味」

学年	1年		2年		3年		計	申告者数
	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	
人数(%)	80(45.1)	177	68(44.4)	153	79(52.0)	152	227(47.1)	482

表8) 山口高等商業学校(1926)

学年・所属	1年		2年		3年		貿易科		別科		予科		計	申告者数
	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	申告者数	愛好者数(%)	
人数(%)	50(22.4)	223	57(24.1)	237	30(14.1)	213	1(14.3)	7	5(20.8)	24	1(4.8)	21	144(19.9)	725

2. 昭和初期における音楽をめぐる状況

2-1.「楽壇解消論」一昭和8年における音楽論争

有名な音楽論争はいくつかあるが、ここでは本稿の問題に関して最も重要と思われる昭和8年の河上徹太郎と山根銀二による「楽壇解消論」論争をとりあげる。この時期を境として学生生活調査における「音楽」の扱い方が明らかに変化したのは、この論争に象徴される日本の「音楽」をめぐる状況の変化が少なからず影響を及ぼしていると思われるためである。

昭和8年の『改造』誌上で河上は、日本の楽壇は偶然音楽に出合ったものが作ったもので必然性はなく、それまでに音楽雑誌上を賑わしていた流行歌による楽壇堕落問題や評論家の批評の仕方は、たとえば文壇のそれに到底及ばないという趣旨の「楽壇解消論」を発表した。彼は、楽壇が「楽壇」を自認するにはまだ成長していない、という。これに対して反論したのが音楽評論家の山根銀二であり、彼は、河上は楽壇の表面しか見えていないと反論する。楽壇は今まさに成長しつつあり、演奏家評論家ともに研究に励み新しい世代を育成しつつある(山根1933)、というものである。

それ以前にも音楽論争がなかったわけではない。日本において最初の音楽論争と呼ばれるものは、大正13年にはじまる大田黒元雄と野村胡堂(あらえびす)の「缶詰音楽論争」である。

これは要約すると、生演奏に対してレコード音楽は所詮「缶詰」音楽であるという大田黒に対し(報知新聞T13/2/14、7面)、あらえびすがこれに対抗して「缶詰」音楽をコレクションしている有名人を挙げ、そのコレクションがその人の芸術観を表わしているのだと反論したものである(報知新聞T14/1/5、3面)。

この二つの論争は、「缶詰音楽」論争が音楽の鑑賞法に争点を置いているのに対し、「楽壇解消」論争は音楽を生業とする集団のありかた、つまり「楽壇」のありかたとその活動に問題が集約されている。この二つの論争をはさんで、職業音楽家や評論家の活動が変化したことが伺える。

音楽評論や鑑賞スタイルの変化については後述することにして、まずはそれぞれの時期において日本において何が演奏されていたかを検討する。秋山(1966)によって収集された当時のプログラムを整理すると、大正13年に開かれた46回の演奏会(うち4回はプログラム不明)のうち、軍楽隊の公園演奏と東京音楽学校の演奏会が殆どを占めている。15回がオーケストラの演奏であるが、うち10回を軍楽隊が占めている(表9)。演奏会一回あたりの演奏曲数も多く、これは演奏時間の長いシンフォニーや組曲などを全曲演奏することができず、短い曲や抜粋曲を演奏していたことを意味する。また、ジョイントコンサートも大正13年に最も多い。一人あるいは一団体で演奏会をもたせることができなかったのである。リサイタルも同様で、賛助出演のある演奏会が14回中4回みられる。演奏会ではまともにシンフォニーやソナタの全曲を鑑賞できた時代ではなく、それらの「断片」しか聴く事ができなかった。しかし、奇しくも大正13年は、ベートーヴェンの交響曲すべてがレコードで揃った年である(歌崎編1998、23頁)。この論争は、外国に行くことの出来たものと蓄音機とレコードを買うことの出来た限られた少数集団のなかでの論争であり、また同時に、この時代に、外国に行くことの出来た者の特権がレコードやラジオによって脅かされるようになったわけである。この論争は、日本における不特定多数の洋楽の聴衆が生れはじめること、同時に、「音楽」というものがそれまでどちらかというと邦楽を中心としたものから洋楽に移行し始めることを示唆してもいる。

表9) コンサートの種類と曲数

1924(T13)

種類	ジョイントコンサート		オーケストラ				リサイタル			室内楽
	東音	民間	軍楽隊	宮内省	デパート	民間	賛助あり	賛助なし	不明	民間
開催数	7	2	10	1	1	3	4	10	4	1
平均曲数	7.43	18	7.5	7	8	7.33	15.5	11.3	-	3
全平均	9.78		8				12.5			3

1933(S8)

種類	ジョイントコンサート		オーケストラ(民間のみ)			リサイタル		室内楽	オペラ
	東音	民間	新響	PCL	コロナ	賛助あり	賛助なし	民間	民間
開催数	0	3	15	1	1	0	12	1	3
平均曲数	0	13.33	3.93	不明	15	0	9.83	6	1.33
全平均	13.33		4.63			9.83		6	1.33

1938(S13)

種類	ジョイントコンサート		オーケストラ(民間のみ)			リサイタル		室内楽	オペラ
	東音	民間	新響	その他		賛助あり	賛助なし	民間	民間
開催数	0	3	12	0		0	1	0	5
平均曲数	0	7.33	3.5	0		0	8	0	2.4
全平均	7.33		3.5			8		0	2.4

秋山(1966)より作成

では昭和8年はどうであったか。演奏会からは軍楽隊も東京音楽学校も姿を消し、民間の団体が演奏会の中心を占めるようになった。オーケストラでは新交響楽団(現NHK交響楽団、以下「新響」)を中心として交響曲の全曲が演奏され、寄せ集めのジョイントコンサートは激減、リサイタルも賛助出演のあるものは無くなった。そして、文部省による全国的な学生調査が行われた昭和13年のプログラムも同様の傾向がみられる。しかし、演奏会開催数は減少傾向にある。この結果は、昭和初期に日本の音楽界において大きな転換があったことを示

しているが、演奏会に通う聴衆の数は増加しなかったということ、そしてその転換は主にレコードとラジオによって音楽を鑑賞する愛好者によってもたらされたことが推測できるのである。この時期は、それまではすべて洋楽と考えられていたものが、高級音楽(すなわちクラシック)、ジャズ、流行歌、というジャンルがつくられつつあった時期であり、「楽壇」は主に「クラシック」関係者の集団として認識されつつあった[1]。この論争は、昭和期における第二の音楽雑誌発刊ブームに重なっており、山根のこの反論は「高級」で「学術的」であることを目指す『音楽評論』の巻頭論文として掲載された。

2-2. 評論の変化

演奏会の変化を概観したところで、ここでは、この音楽論争と前後して、評論そのものがどのように変わったかを評論家の書いたものをとりあげて考察したい。日本最初の音楽論争を展開した大田黒元雄と野村胡堂(あらえびす)を中心に、その内容を比較する。
まず大正期において、この二人は何を書いていたのか。

大田黒元雄は、「結局蓄音機の音楽というものがかん詰の音楽であるから、そこにあらはれた風味を以て真の風味を断定してはならないといふことである」といいながらも、
「日本のやうに蓄音機以外には、めつたに音楽らしい音楽を聞くことの出来ない国では、蓄音機が娯楽の道具以上にさへ考へられて居るのもまつたく無理はない。多くの熱心な好楽家に取って蓄音機はたしかに音楽研究の最も大切な資料となって居る」と缶詰論争で書いている。というのは、彼が外国でのコンサートを念頭においているからである。「ロンドンの王立歌劇場であるコヴェント・ガアデン劇場などは隨分廣いものですから、‥‥それが上から下までぎつしり詰つたところはまつたく華やかなもので、殊に歌劇となると三等や四等あたりの客まで正装して來るので餘計さうなのです。私がはじめてこの歌劇場に行ったのは、一九一三年の二月、ロンドンへ着いてから一週間ばかり經つた時分のころでした。私はその晩にシュトラウスの「サロメ」を聽きに行ったのです」(大田黒1925/1939、353頁)。彼の音楽評論はどちらかというと彼が外国で見たものの印象記といったものであった。

一方、野村胡堂も、報知新聞上の音楽連載「音楽漫談ユモレスク」(1924〜)ではレコードの紹介や音楽会の近況などをさらりと書くにとどまっていた。レコードに重きを置いていたのは、先に確認したように、単に演奏会が充実していなかったためと思われる。「モジュヒン氏の様な立派な歌ひ手は、次には何時来ることやわかりませんから、日蓄へ残して行った十何枚かのレコードは、本当に日本音楽界へのい、記念になりました」(報知新聞T13/10/13、3面)。

野村胡堂が本格的に評論を書き始めたのは昭和10年代であるが、その評論ぶりはこの「ユモレスク」とは全く異なる志向性を持つようになる。その一例として、彼の代表作の一つである『名曲決定盤』(1939)に見てみよう。
「いかなる芸術でも、その最後の値打を決定するためには、創作者、演奏者の人格にまで戻らなければならない。‥‥クライスラーの弾く小曲に、くめども尽きぬ人間味の溢れるのは、この人間クライスラーの心の中から流れ出る情味のためではなかろうか。クライスラー老いたりと言われながらも、この人のヴァイオリンの音には、聴く者の胸に食い入る「何物かが」

あることは否む由もあるまい」(上38～40頁)「フィッシャーのタッチは明確で清澄を極める。‥‥テンポも表情記号もそのままで、美しい音色(トーンカラー)と、整然たるスタイルで、ゴシック建築のような素晴らしい古典美を盛り上げて行くのだ」(上206頁)。

また野村光一は、『レコード音楽読本』(1934)のなかで、

「其処で、私は、蓄音機に依る管弦楽演奏の鑑賞をもっとも有利に導く為の便法として、特に、管弦楽レコードの際には、管弦楽の總譜を見乍ら、それを味ふことを諸氏に奨めたい。‥‥總譜と対照して管弦楽レコードを鑑賞すると、こんがらがつた複雑な部分は、それに依つて、知的に分解されて来る。是は、楽譜を知らずに耳だけで聴くと、如何に経験のある耳でも、殆ど細いところは分解され難いのである。斯様にして、各パートの間が明瞭に区別されて、それ等の大体の構造や特徴が知的に頭に入った後、今度は、楽譜を退けて、レコードの音だけに親しめば、我々は、初めて、其処に、管弦楽曲の細部に亘る迄の全貌が悉く知解されると共に、それに依って、経験と想像を働かせてそれ等全体から統一した音楽的感興をも味はふことが出来るのである」(野村1934、18～19頁)とまで書く。

音楽評論は、西洋文化に対する近さを利点にして単に外国の音楽会やレコードを紹介するという著述活動からがらりと姿を変え、主にレコードによる演奏を対象として、演奏家や作曲家を人格者として扱い、読者にその作品、演奏の分析的、かつ内在的な解釈を促すという方向へと変化を遂げる。西洋の知識をベースにした、精神性に重きを置いたものであることは言うまでもない。第二の音楽論争が起こった昭和8年には、音楽評論はこのような性質をもつようになっていたのである。昭和初期の評論家は、レコード・ラジオによって音楽を聴く聴衆を対象として鑑賞法を説き、かつ音楽の芸術性を強調することに力点を置いた。

では、なぜこのような変化がうまれたのだろうか。それは、評論家集団の形成過程によるところが大きいと考えられる。当時の西洋音楽普及において、オピニオンリーダーとして重要であると思われる、10冊以上の音楽書を著した評論家をピックアップし、その学歴を調べたところ、若い世代ほど音楽学校を経由せず、一般の高等教育機関を経由した者が増えていくという現象がみられた(表10)(加藤1997)。さらに重要なことは、彼らは本職として音楽評論を書いていた訳ではないことである。大田黒元雄はロンドン大学中退後、東京高級鋳物㈱取締ほか様々な会社の重役を兼任しながら音楽評論を書いていた。野村胡堂も、一高から東京帝大(法科)に進学、中退後新聞記者として、また小説執筆の傍ら音楽評論を書いていた。

表10) 評論家の学歴

	音楽学校	一般大学	その他	不明	計
～1895生	7	3	0	2	12
1896～1910生	0	6	0	0	6
不明	-	-	-	4	4
計	7	9	0	6	22

小川(1977)より作成

表11) 新交響楽団発足時のメンバーの出身(S2)

東洋音楽学校	13名
デパート少年音楽隊	11名
学生派	6名
陸海軍楽隊	5名
私学(音大)出身	4名
浅草・横浜派	2名
東京音楽学校	1名
不明	6名
合計	48名

大森(1986)157頁より作成

評論家によるこのような音楽への認識は、演奏者のそれとは全く異なったものである。なぜ彼らはこのような文章を書くようになったのだろうか。ひとつには、この時代はレコードやラジオが普及し不特定多数の聴衆が形成されつつあった時期であり、新しい聴衆のための

解説書が必要であったこと。次に、この時期は同時に中根銀二がいうように「楽壇」が形作られる時期であった。「楽壇」は、自らのアイデンティティーを形成する必要に迫られていたからである。それが「楽壇解消論争」の争点であった。それまでは、演奏家、教育家、評論家の間には何の関係も連帯もなかった。演奏家の多くは軍楽隊の退役者であり、また明治40年頃に流行するデパート少年音楽隊出身者であり、ダンスホールや活動写真の伴奏者としてただ楽器を演奏していただけであった(表11)[2]。また、演奏家と評論家で学歴に大きな差がある理由は、演奏家になることは、当時高等教育を受けた者には許されなかったことにある。中には、その風潮に抵抗して敢て演奏家になった者もいたが(近衛秀麿、朝比奈隆、斎藤秀雄など)、大多数は家族に猛反対され演奏家になることを断念し、中には妥協策として評論家になった者もいた[3]。また趣味としても西洋音楽は「まっとうな」趣味として認識されていたわけではなかった(加藤1997)。それゆえに彼らは自らの西洋の知識をふりかざして評論を書いた。評論家は、ただ単に楽器を演奏する職業演奏家と意図的に差異化をはかり、且つ洋楽を仕事・趣味とすることの正統化を同時にはかろうとした結果が、この変化を生み出した一因である。

3.「音楽」愛好の質的変化

以上により、昭和8年前後が西洋音楽、特にクラシック音楽にとって重要な転機であったことが伺える。この時期より以前は「音楽」というものは様々な分野を含んでいたのである。しかし、それ以降、「音楽」は「洋楽」、つまり「クラシック音楽」を含むものに変化した。これが、昭和8年以降の学生調査において、邦楽のみが「音楽」の外に分類される傾向を生んだ原因であると考えられる。一見「音楽」愛好者が昭和期を通じて増減があまり見られないことも、これに起因するといえよう。つまり、音楽愛好者は存在していたが、愛好される「音楽」それ自身は質的に変化しているのであり、それは調査結果からは直接読み取ることができないものなのである。

学生における音楽愛好は昭和8年前後を機に、以下に述べるように質的に大きく変化したと考えられる。まず、昭和8年以前は「音楽」は洋楽も邦楽も、さらに流行歌や学校唱歌など、ありとあらゆる分野を含んでいたが、調査結果に見られるように、楽器の演奏は含んでいなかったと思われる。それは、洋楽愛好者が相対的に少なかったことにも関係するであろう。この時期、特に大正以前における洋楽愛好者は、蓄音機普及以前に両親や自らに海外生活の経験があり違和感なく西洋の音楽に触れることの出来た特権的な人々であり、これは、大田黒元雄(1893生)、近衛秀麿(1898生)に代表される明治前期～中期生れの者が中心である。大正後期では、新中間階層出身の比較的裕福な家庭出身で、西洋的文化に親和的で楽器や蓄音機が家にあるなど西洋音楽に触れることが出来た人々。これはちょうど旧制高校の文化がバンカラから文学・哲学中心の教養主義へと移行し、文化系の団体が学校で組織される段階(Roden1983、166～168頁)に学生時代を送った者が中心となる。朝比奈隆(1908生)や斎藤秀雄(1902生)がその代表である。この段階までは一般的に西洋音楽が理解を得ていない時代であり、音楽団体も十分な人数が集らなかった(朝比奈1985、36頁)。しかし、昭和8年以降にな

ると、楽器をもたなくとも、レコードを買う金が無くとも、西洋音楽を愛好することができるようになった。彼らは昭和10年代から一般的になったと考えられる音楽喫茶にたむろして音楽に没頭し、スコアを持ってベートーヴェンの哲学と芸術に陶酔した世代である(歌崎編、1997)。

もちろん、この分類は一種の理念型であり、この順序に音楽愛好スタイルが完全に転換したわけではないことを断っておきたい。昭和初期の愛好者の大多数が後者のタイプに属することは確かであるが、それによってそれ以前の音楽愛好者が消滅したわけではなく、蓄音機や外国で音楽を聴く古い形態も存続しており、それぞれの世代内部で愛好スタイルをめぐって対立や葛藤があったことは考えられるが、ここではその点については立ち入らずに、これらの世代間における差異を中心に考察をすすめる。

重要なのは、昭和初期（特に「楽壇解消論争」後）～戦前までに学生時代を過した世代の音楽の聴き方に注目して、この時期の学生調査結果に現れた現象を説明することである。この時期は、あらえびすの音楽入門書『バッハからシューベルト』(1931)が音楽書としては空前の10万部を突破(藤倉1995、199頁)、野村光一『レコード音楽讀本』(1934)は１月に発売され７月には35版を重ねている。学生は外国語や西洋芸術・哲学に親和的であったがために、芸術家の精神性、内面性を強調するあらえびすの解説にのめりこみ、野村光一のまずはスコアを見ながら音楽を聴け(野村1934、18頁)という助言を忠実に守り、髪を書きむしり目を瞑ってタクトを振りながら(歌崎編1997、299頁)、ベートーヴェンのレコードをコーヒー一杯で涙と共に聴いたのである。この世代の代表は小説家の五味康祐(1921生)や詩人那珂太郎(1922生)である。彼らの音楽の聞き方は、音楽評論の変化と並行して、非常に真摯であり純化された形で現れる場合もあった[4]。

4.結論と今後の課題

学生調査報告に現れる「音楽」というカテゴリーが、昭和7年から10年頃に洋楽を含み邦楽を排除する傾向が生まれたのは、当時の職業音楽家が構成する「楽壇」の成立とその展開に対応していたことを明らかにしてきた。調査報告での集計結果を見る限りでは「音楽」愛好者は増加しているように見える。しかし、それは「音楽」そのものの範囲が洋楽を中心として拡大し、「音楽」がより広義の意味で理解されるようになったためでもある。実際に「音楽」愛好者が増減したかということはここでの問題ではない。むしろ、「音楽」の意味の拡大と邦楽の「音楽」からの排除という現象は、「音楽」愛好が洋楽の鑑賞、及び演奏を中心とした愛好の仕方へと変化したことを示唆している。時には非常に極端で純化された「芸術鑑賞」というスタイルをも生み出したこと、しかもその変化は、当時の高等教育を経由した評論家と在籍している学生とがたまたま結びつくことによって生じた変化であったことを表している。

しかし、ここでは、学生の音楽愛好の形態の変化を、洋楽の職業音楽家集団に結び付けて分析したにとどまっている。また、学生における「音楽」愛好者が、それぞれの学校において学年別・学部別に様々な様相を提示していることについては説明することができない。「音楽」が洋楽を中心とするものとして意味が書き換えられ、学生の間にこれを中心とした「純

粋芸術鑑賞」スタイルが生まれたことは、何を意味しているのか。また、その後の音楽愛好にどのように影響したのか。そして、この傾向は一般の音楽愛好者についても見られるのか、など多くの問題は、今後の課題として残されている。

注

(1) 昭和4年と8年は洋楽専門雑誌の発刊ブームであるが、昭和6年頃から評論家の間で「楽団堕落問題」が沸騰する。代表的なものは伊庭孝「日本楽壇の清算事項－楽壇の堕落を如何せん－」(『音楽世界』第4巻9号、1932)である。これは、レコードの普及による演奏会不振、また西洋調の流行歌の興隆によって批評家たちが「洋楽」「楽壇」の輪郭をつくるきっかけとなった。この問題については別の機会に詳しく検討する。

(2) 昭和6年「豊島園少年音楽隊」(昭和2年成立)解散時、30余名のメンバーのうち、15名は大阪のカフェー「赤玉」で一年ほど吹奏楽団として演奏した。その後、3名は新交響楽団に、6名はジャズ演奏家として再就職した(大森1986、172頁)。

(3) 野村光一(1895年生)が評論家になった経緯をこう回想している。「子供の頃からとても音楽が好きで、何とかして音楽家になりたいと思ったんだけど、「そんなバカなことはやるな」ってピアノも買ってくれないんですよ。それでくさくさしながら中学を出て高等学校の試験を受けたんですけど、そんなもの受ける気は何もないんだからみんな落っこっちゃった。それで東京へ出て来て、その頃一番自由な校風の慶応義塾へ入ったというわけですよ。本当はピアニストになりたい、けどこの年令ではとてもダメだ、というので音楽評論家になろうと思ったんですね」(三善編1978、85頁)

(4) 当時の音楽青年の一例として五味康祐が挙げられるが、彼はこのように音楽を聴いていた。「ぼくたちの青春時代、いわゆる“名曲喫茶”には、いつも腕を組み、あるいは頭髪を掻きむしり、晦渋な表情でまるで思想上の大問題に直面でもしたように、冥目して、ひたすらレコードに聴き耽る学生たちがいた。きまってそんなとき鳴っているのはベートーヴェンだった。‥‥彼はいつまでも、一杯のコーヒーで自分の好きな曲の始まるのを待つのだ。念願かなって例えば二長調のヴァイオリン協奏曲が鳴り出せば、もう冒頭のあのｐのティンパニーを聴いただけで、作品六一の全曲は彼の内面に溢れる。ベートーヴェンのすべてがきこえる。彼はもう自分の記憶の旋律をたどれば足りたし、とりわけ愛好する楽節に来れば顔をクシャクシャにして感激すればよかった。そんな青年が、戦前の日本のレコード喫茶には、どこにでも観られた。‥‥大方は苦学生だったと思う」(五味1981、61頁)。

文献

秋山龍英『日本の洋楽百年史』第一法規1966
朝比奈隆『わが回想』中公新書1985
あらえびす『名曲決定盤』上下 中公文庫1939／1981
あらえびす『ユモレスク』報知新聞1914/10/13、3面
あらえびす「カン詰音楽」『ユモレスク』報知新聞1925/1/5、3面
伊庭孝「日本楽壇の清算事項－楽壇の堕落を如何せん－」『音楽世界』第4巻9号、1932
歌崎和彦編『証言―日本洋楽(クラシック)レコード史(戦前編)』音楽之友社1998
太田黒元雄『新音楽夜話』第一書房1925/1939
太田黒元雄「蓄音機」報知新聞1924/2/14、7面
大森盛太郎『日本の洋楽』上 新門出版社1986
小川昂『洋楽の本』民音音楽資料館1977
加藤善子「昭和初期の学生と音楽愛好」『大阪大学教育学年報』創刊号1996
加藤善子「評論家と演奏家」『大阪大学教育学年報』第二巻1997
河上徹太郎「楽壇解消論」『改造』1933/3

五味康祐『ベートーヴェンと蓄音機』ランティエ叢書1997
野村光一・中島健蔵・三善清達編『日本洋楽外史』ラジオ技術社1978
藤倉四郎『銭形平次の心』文藝春秋1995
山根銀二「楽壇解消論に答える」『音楽評論』創刊号、音楽評論社1933/4
Roden、D.T.森敦訳『友の憂いに吾は泣く』上下講談社1983

資料

「東京帝国大学学生 生計調査報告」東京帝国大学学生課 1930
「生徒生計調査報告」『長崎高商研究館彙報』第16巻第1号長崎高等商業学校研究館 1930
「學生學園生活統計」神戸商業大學學生課調査 1932
「學生生活調査報告」 東京商科大學豫科 學生主事室 1934
「生徒生計調査報告（第二回）」『長崎高商研究館彙報』長崎高等商業学校研究館 1935
「東京帝国大学 学生生活調査報告」東京帝国大学学生課 1935
「生徒生活調書」和歌山高等商業學校 1935
「生徒生計調査書」山口高等商業學校東亜経済研究所 1936
「山口市學生生計調査書」山口高等商業學校東亜経済研究所 1936
「學生生徒生活調査報告」北海道帝國大學 1936
「生計調査報告」第二高等学校生徒課 1936
「学生生徒の生活に関する調査」文部省思想局『思想調査資料』第32集、1936
「第五回 生活調査報告」第二高等學校尚志會共濟部 1937
「東京帝国大学 学生生活調査報告」東京帝国大学学生課 1937
「立教大學學生生活調査報告」立教大學學生課 1939
「第六回 生活調査報告」第二高等學校護國尚志會生活部 1942
『旧制高等学校全書』第７巻(2) 旧制高等学校資料保存会1984
文部省『学生生徒生活調査』1938調査

Students' Love of Music through Surveys of Lifestyles

Changes of the meanings of "Music" and of the ways of Appreciation

Yoshiko KATO

This paper is to describe how students appreciated music and what they thought as music in the early Showa period, using by various surveys on lifestyles of students. First, the category "music" turned out to have changed at around 1933, precisely, since then "music" acquired a new meaning, which is including Western classical music. And Japanese traditional music was going to be excluded from so-called "Music." Second, this change went on as the Western music field in Japan developed at the same time, and then that also effected on the style of music appreciation. The students' survey data shows muliple tendencies, however, that's because there was as a big qualitative change of the meaning of "music."